

広報 もり 中部の森林

迎春

写真：南岳より朝焼けに染まる槍ヶ岳（飛騨署管内）

令和8年 年頭のご挨拶
特集

- ・ 多様な森林への誘導
- ・ 林業技術の向上に向けた取組

シリーズ

- ・ 現場最前線からの便り、私の森語り、中部の保護林、秘蔵写真・今は昔の林業

私の森語り「岐阜樹木育苗センター設立から
特定母樹を用いたスギコンテナ苗の生産」
住友林業 岐阜樹木育苗センター 川添 峰夫



林野庁中部森林管理局

2026/No.257



令和八年 年頭のご挨拶

中部森林管理局長

佐伯 知広
さえき ともひろ

新年明けましておめでとうございます。

日頃より国有林野の管理経営に特段の御支援と御協力を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年は、二月下旬から三月にかけて各地で発生した大規模な林野火災や八月上旬の大雨など、大災害が全国で発生しました。加えて、クマによる人身被害が記録に残る限り過去最多を更新したところです。被災された方々にお見舞いを申し上げます。

中部森林管理局としても、引き続き被災箇所 の 早期復旧を図るとともに、防災・減災、国土強靱化のための森林整備や治山対策を一層推進してまいります。また、社会問題化しているクマ被害の

対策については、「クマ被害対策パッケージ」に基づき豊凶調査や生育環境の保全・整備などに取り組みます。

さて、先人の努力により戦後造成されてきた人工林の約六割が五〇年生以上となつて利用期を迎えており、「伐つて、使つて、植えて、育てる」資源の循環利用を確立して次の世代へと引き継ぐことが大切です。森林資源の循環利用に向けて、路網の整備や再造林の低コスト・省力化など効率的な施策の推進に取り組んでまいります。

また、多様な森林資源を有する国有林の特性を活かして様々なニーズに応じた国産材の安定供給等に努めてまいります。特に昨

年は二十一年に一度の伊勢神宮式年遷宮関連行事が始まり、六月には御用材を伐り出す「御杣始祭」と「裏木曾御用材伐採式」が、長野県上松町と岐阜県中津川市の管内国有林において執り行われました。「木の文化」を支える側面から、文化財などへの大径材の供給を行うほか、伝統的な林業技術の継承にも継続して協力してまいります。

さらに、地球温暖化防止や花粉症発生対策などの国民の要請に応えた多様で健全な森林づくりを進めるほか、シカ等による野生鳥獣被害対策の推進、森林・林業に関わる人材の育成など、民有林・国有林の枠を越えた共通の課題についても積極的に取り組ん

で役割を果たしていく考えです。

富山県・長野県・岐阜県・愛知県の四県にまたがる当局管内は、日本アルプスをはじめとした急峻・複雑な地形と脆い地質を有する森林が多く存在しています。治山対策等を通じた国民の安全・安心の確保を図っていくことが求められています。昨年の六月に岐阜県飛騨地域で豪雨が発生し、山地災害の発生が懸念された際には、被害状況を確認するため民有林を含めてヘリコプターによる空中からの調査を実施しました。今後も迅速な災害対応を進めてまいります。

森林・林業に関わる課題やニーズは多様化していますが、管内の国有林を「国民の森林」として管理経営を行う役割が変わるものではありません。今年も、地元の自治体をはじめとする関係者の皆様と連携しながら地域の課題の解決に向けて取り組んでまいります。

多様な森林への誘導

地球温暖化対策や生物多様性保全

森林計画制度について

森林は、木材を始めとする林産物を供給するほか、国土の保全や水源のかん養、生物多様性の保全、地球温暖化防止など様々な機能を発揮し、私たちが安心して暮らせる社会を支えています。

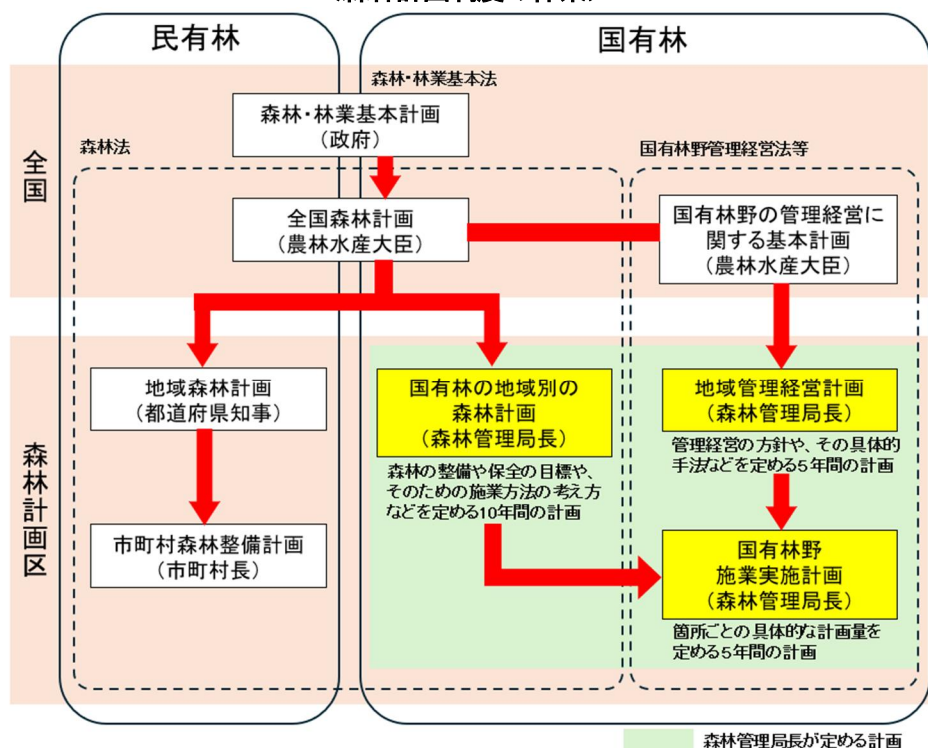
森林が荒廃するとその回復は容易ではなく、長い年月を必要とします。そのため、計画的・長期的な視点に立ち森林を適切に取り扱う仕組みとして「森林計画制度」が定められています（下段の図を参照）。

森林計画制度では、森林・林業基本法など関係する法律に基づいて国や地方自治体はそれぞれの立場で森林に関する計画を立てます。

中部森林管理局では、「森林・林業基本計画」（令和三年六月閣議決定）や「国有林野の管理経営に関する基本計画」（令和五年十二月策定）に基づき、地球温暖化対策や生物多様性保全等の観点から、多様な森林

る基本計画」（令和五年十二月策定）に基づき、地球温暖化対策や生物多様性保全等の観点から、多様な森林づくりを推進することとしています。

＜森林計画制度の体系＞



県	森林計画区	該当署等
富山県	神通川	富山署
	庄川	
長野県	千曲川下流	北信署
	中部山岳	中信署
	千曲川上流	東信署
	伊那谷	南信署
	木曽谷	木曽署 南木曽支署
岐阜県	宮・庄川	飛騨署
	飛騨川	岐阜署
	長良川	
	揖斐川	
	木曽川	東濃署
愛知県	尾張西三河	愛知所
	東三河	

中部局管内の森林計画区一覧表



中部局管内の森林計画区位置図

計画課では、管内十四の森林計画区（流域）において「国有林の地域別森林計画」をたて、「地域管理経営計画」及び「国有林野施業実施計画」を定めています（左図と表参照）。

「国有林野施業実施計画」は、森林管理局長が国有林野管理経営規程に基づき、五年ごとに五年を一期として計画区の箇所ごとに策定するもので、伐採方法や伐採量、伐採に伴う更新方法や更新量などを具体的に定めています。

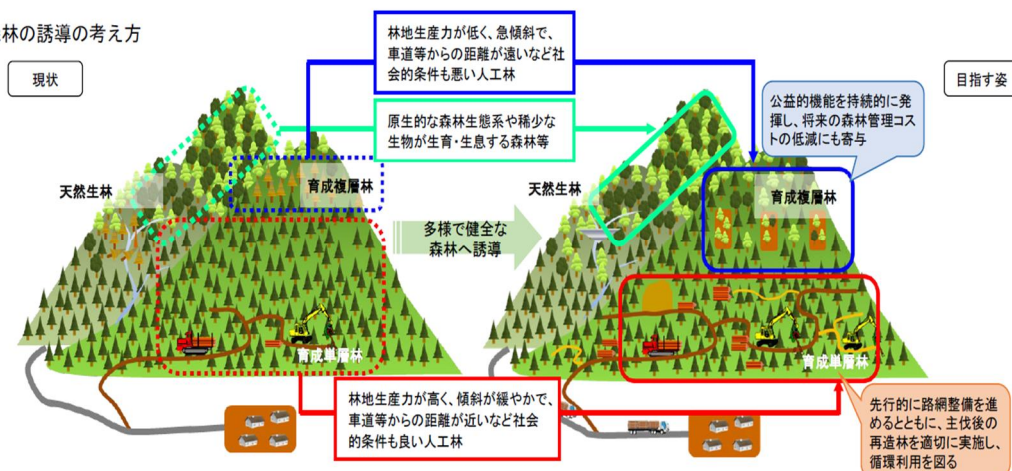
多様な森林づくり 「見える化」プロジェクト

多様な森林づくりに当たっては、充実した人工林資源を最大限活用するとともに、効率的かつ効果的に森林を整備・保全し、公益的機能を継続的に発揮するため、地域ごとの自然条件や社会的条件を踏まえ、

◆傾斜が緩く集落から近いなど林業経営に適した森林は、多様な伐期と植栽により確実な更新を図り、資源を循環利用する育成単層林と位置づけて維持

◆奥地水源など条件不利地等では、針広混交林化、広葉樹林化を推進など様々な森林を適切に配置することが重要です。

■ 森林の誘導の考え方



また、森林計画の策定に当たっては、将来に目標とする森林の姿や、そのために適切と考えられる施業方法を検討する必要があります。



多様な森林づくりの事例：東信森林管理署 浅間山国有林

（右写真）カマツの人工林では、
●多様な伐期と植栽によって確実な更新を図り、資源を循環利用する森林と位置づけ
●地形や自然条件にあわせて択伐や帯状、群状による伐採と、広葉樹の導入等により育成単層林から複層林化を目指すなど、公益的機能も持続的に発揮するよう計画しています。

「見える化」プロジェクトとは、国有林内に一、〇〇〇ヘクタール程度の「見える化」区域を設定し、多様な森林づくりを進めるための課題や改善策等を検討、実践する取組です。



「見える化」プロジェクト事例：岐阜森林管理署 落合国有林

中部局管内では、岐阜森林管理署の飛騨川森林計画区において、「急傾斜地の森林を、皆伐を予定しない複層林へ転換するなどの災害に強い森林づくり」に取り組んでいます。

（右写真）ヒノキの人工林において、天然木を活用した施業を行い、主伐後の伐採地に侵入していた天然木を可能な限り活用し、針広混交林の育成を図ることとした区域です。

「見える化」プロジェクトの詳細は「こちらへ」



面的複層林施業

「森林・林業基本計画」では、いわゆる里山林など公益的機能発揮のため、継続的な維持・管理が必要な森林や針葉樹林内にあり、継続的な資源利用が見込まれる広葉樹林等は、更新補助作業等により育成複層林に誘導する、とされています。



北信森林管理署管内での計画編成にむけた現地検討会の様子

せん。天然力を活用して確実に次世代の森林を作っていくためには、施業に伴うコストに加え、技術的な検証を継続して積み重ねる必要があります。

国有林野事業では、面的にまとまった森林を管理しているという特性を活かし、小面積の伐採箇所をモザイク状に配置する「面的複層林施業」を実施しています。（前頁の東信森林管理署の事例が該当）。

森林計画の編成に当たっては、課題の検討や知見の共有を目的として現地検討会を行っています。検討会では、伐採の指定から、伐区の設定（山割り）、収穫調査、製品生産事業、造林事業の実行に至るまでの一連の取組状況を説明します。これにより、各署等の職員と計画課（伐採指定）、森林整備課（造林事業）、資源活用課（伐採事業）の職員と考え方を共有することができ、施業や実行の諸課題を整理しつつ、試行錯誤しながら多様な森林づくりの取組を進めています。

広葉樹二次林

中部局管内の広葉樹二次林（過去に薪炭林として利用）は、近年ではほとんど施業が行われていない一方で、ナラ枯れやニホンジカによる被害などの被害も確認されています。

こうした状況を踏まえ、管内の広葉樹二次林について、施業の必要性を検討した上で、施業を必要とする箇所の考え方や留意すべき事項、伐



第1回 現地検討会の様子（飛騨森林管理署）



岐阜県森林組合連合会 飛騨林産物共販所現地視察

採木の利用可能性等について、適切な取扱いを検討するため、「広葉樹二次林の施業上の取扱いに関する検討会」を設置し、令和七年度は現地検討会を二回開催しました。

一回目は、岐阜県飛騨市の民有林と国有林で開催し、広葉樹のまちづくりに取り組んでいる飛騨市の担当者に参加いただき、地域ニーズに応じた出材計画や施業方法など現場で直面している課題の洗い出しなどを行いました。また、実際の出材状況の知見を得るため、高山市の飛騨林産物共販所を視察しました。



大臼川生産森林組合が管理するブナ林の現地視察

二回目は、ブナに着目し、新潟県魚沼市、長野県山ノ内町等の民有林と国有林で開催しました。

豪雪地帯として有名な魚沼市で、かつて薪炭林だったブナ林を活用する「スノービーチプロジェクト」に取り組み新潟大学名誉教授の紙谷氏と、ブナ研究の第一人者である森林総合研究所所長の浅野氏に参加いただき、同市内の大臼川生産森林組合が管理するブナ林を視察し、ブナの更新方法や活用方法、具体的な施業方法などについてアドバイスをいただきました。



北信森林管理署 往郷山国有林のブナ天然林現地視察

また、浅野氏から「ブナの更新について」と題した講義で、ブナ林は樹種や樹齢の異なる小さな森林がモザイク状に配置されているため更新の機会は少なく、上木が枯死して倒れて空間ができた際によりやうく林床の個体が成長のチャンスを得る、という更新のメカニズムを解説していただきました。

広葉樹林の確実な更新や地域ニーズに対応するため、検討会が出された意見等を参考にしながら、地域に応じた施業を適切に実施していくよう取り組んでまいります。

【計画課】

令和7年度

中部森林・林業交流発表会のご案内

本発表会は、中部森林管理局管内の各森林管理署等や地方自治体、教育機関、林業事業体等が日頃の取組成果を発表することを通して、民国の交流を深め、成果の普及を図り、森林・林業・木材産業の発展に資することを目的として、毎年開催しているものです。

開催日：令和8年1月27日(火)
～1月28日(水)
場所：中部森林管理局
3階 大会議室
発表課題：国有林 14課題
民有林 5課題



発表会当日は、会場にてどなたでも聴講可能です。
発表課題の詳細等については、HPをご覧ください。
コードはこちら



林業技術の向上に向けた取組

中部森林管理局の森林整備課では、森林の整備、分収林、林道事業の業務を担っております。今回は、令和七年度に取り組んだ林業技術の向上に向けた取組について紹介します。

造林技術検討会の開催

持続的な林業経営を構築するためには、伐採から再造林・保育に至る収支のプラス転換の実現に向けた取組が必要となります。

伐採した後には植栽を行います。成長のよい苗木やコンテナの中に施肥をしたコンテナ苗を植えることにより苗木の成長を促進させて、下刈りなどの造林事業に必要な保育作業を軽減できないか検証を進めています。

特に林業は炎天下や急傾斜地での作業であることからこれらの負担軽減を図ることも大切です。



カラマツの花の様子（赤く上向きなのが雌花）

令和七年度は、苗木の生産に着目し、カラマツの着花状況を確認するための取組を行いました。

長野県の主要な樹種の一つであるカラマツは、種子の豊凶の周期が五年〜七年と言われており、苗木を安定的に供給するためには、その年における着花状況を把握することが有効です。

カラマツの花は五月頃に新葉と同じ時期に開花すると言われています。花が終わると薄緑色の球果になります。



双眼鏡でカラマツの着花状況を確認する

中部局では、着花を確認できる時期に合わせ、六月十六日に長野県御代田町の東信森林管理署管内の浅間山国有林で「造林技術検討会（カラマツ豊凶調査）」を開催しました。

検討会では当局のほか、長野県長野県山林種苗組合、林業事業者などの関係者四十八名が参加して、豊凶調査の精度向上を目的に実施されました。（中部の森林「二五四号」）カラマツの枝には数十個の着花確認され、参加者は双眼鏡などを使用して熱心に着花の状況を確認していました。

今回の造林技術検討会を契機として、当局では長野県内の国有林でカラマツの種子が採取できる候補地を選定した後、長野県や長野県山林種苗組合などの関係機関に情報提供しています。

カラマツの種子を継続して採取し、カラマツの苗を安定的に供給するために、国有林のフィールドを活用して、今後とも関係機関と連携を図りつつ進めたいと考えています。

（写真右）
カラマツの球果
（写真下）
拡大したもの



拡大写真は、（国研）森林研究・整備機構発行「カラマツ種苗安定供給のための技術開発」の表紙より引用

林道現地検討会の開催

林道は、森林の管理や整備、木材の搬出等に欠かせない非常に重要な施設です。その業務には専門的な知識が必要とされており、技術者の育成やベテラン職員から若手への技術の継承が課題であり、解決のため現地検討会を開催しています。

豪雨等により林道の損壊が発生した際には多くの場合、初期段階として職員が現地の災害調査を実施してきました。崩壊した急傾斜地などに入り、ポール等の器具を使用して調査を行うことから危険を伴う場面もあります。このため、職員による安全な調査や調査の省力化をサポートするシステムを導入することとしました。

具体的には、スマートフォン（以下「スマホ」）を利用してレーザースカナや災害調査用のアプリケーションを活用できるよう、（株）マプリイが提供する「マプリイ林業」をスマホにインストールして各森林管理署に一台ずつ配備しました。



アプリ操作方法を学ぶ担当者

配備にあわせ、機器を現場で活用できるように、林道担当職員を対象とした現地検討会を、八月二十日～二十二日に東濃森林管理署で開催しました。

一日目にアプリの操作方法を習得し、二日目に現地へ向かい、林道や法面の崩壊した場所で、レーザーの照射角や範囲を確認しながらスマホを操作して3D点群データを取得しました。また、現地では背負式タイプのレーザースカナによるデータ収集も行いました。背負式タイプは、機器を背負って崩壊地周辺の林道を歩くことで広範囲のレーザー照射が可能で、スマホを利用する場合よりも面積の大きい崩壊地の測定も可能となります。

三日目に現地で習得したデータから3D画像を作成して崩壊地の状況を分析しました。

今回の現地検討会での操作演習を通じて、今後、各現場で広く活用することにより、調査時の安全確保や省力化、技術の向上に繋がることが期待されるところです。



mapryPC上でのD T Mデータ画像



背負式レーザースカナで取得したデータから3D画像化した崩壊地

(写真上部左側)

崩壊地周辺の林道を歩いてスマホでのレーザー照射の範囲を確認する様子

(写真上部右側2枚)

林道下の崩壊地をどこまで計測できるかを確認する様子と手元でのスマホ操作

(写真下部右側)

レーザースカナを背負い、実際に現地で林道を歩く様子(右の写真)と収集したデータから作成した3D画像(上部の写真の崩壊地を画像化している)

現地検討会では、あわせて林道の横断溝の土砂を除去する作業も実施しました。

横断溝にたまった土砂や落ち葉を清掃することで、路面に流れる水の量を抑え、路面が洗掘される被害の軽減することに繋がります。

若手職員の中には横断溝の土砂の除去は初めての職員もいたことから、ベテラン職員から指導を受けながら、重労働の慣れない作業を丁寧に行いました。



(写真上)
ベテラン職員の指導を受け、横断溝の重いフタを外して土砂を除去する

(写真下)
土砂が除去された横断溝



新たな獣害対策の 実証実験(特殊樹脂ネット)

シカなどの獣害対策としては、造林地の周囲全体をネットや金網などの防護柵で囲む方法と、植栽した苗木を個別にネットで覆う単木保護があります。さらに、必要に応じてシカが苗木に近づかないよう忌避剤を散布して食害の防止に努めています。

これらの方法は、周辺のシカの生息密度や作業のコストなどを考慮して検討する必要があります。



ニホンジカの食害防止の防護柵(ネットタイプ)



植栽した苗木の単木保護

中部局では今回、新たな試みとして「シカを滑らせて近寄らせない」特殊樹脂ネットを試験的に設置しました。対象としたのは、長野県伊那市の南信森林管理署管内の手良沢山^{てらさわやま}国有林と岐阜県高山市の飛騨森林管理署管内の山中山^{やまがやま}国有林で、いずれもシカの生息密度が比較的高いとされている地域です。

イノシシやシカの硬い蹄^{ひづめ}は山の斜面の移動に適していますが、この特殊樹脂ネット(ポリエチレン製、長さ五^{メートル}、幅一・二^{メートル})の表

面は、蹄が滑りやすいとされる素材や構造となっています。
南信署管内の試験地は、スギとヒノキを植栽し、忌避剤が散布されています。樹種別に一カ所ずつ、植栽木の周囲に縦五^{メートル}×横十^{メートル}の範囲に設置しました。
飛騨署管内の試験地は、カラマツを植栽しており、縦五^{メートル}×横十^{メートル}の範囲を二箇所設置しました。



特殊樹脂ネット(左上は表面、左下は裏面(引用：前田工織株式会社))



南信署の特殊樹脂ネット設置箇所

設置箇所には特殊樹脂ネット付近に近づくニホンジカ等の野生動物を撮影するため、センサーカメラも設置して調査を継続することとしています。

この特殊樹脂ネットを敷設する際は、事前に周辺の落枝や浮石などの障害物を除去する必要がありますが、ネットはカッターで容易に切断でき、金属のピンを利用して固定することで簡単に設置が可能です。

今後、ネット設置後の獣害被害の状況や設置コストなどを検証していきます。

【森林整備課】



試験地 ②

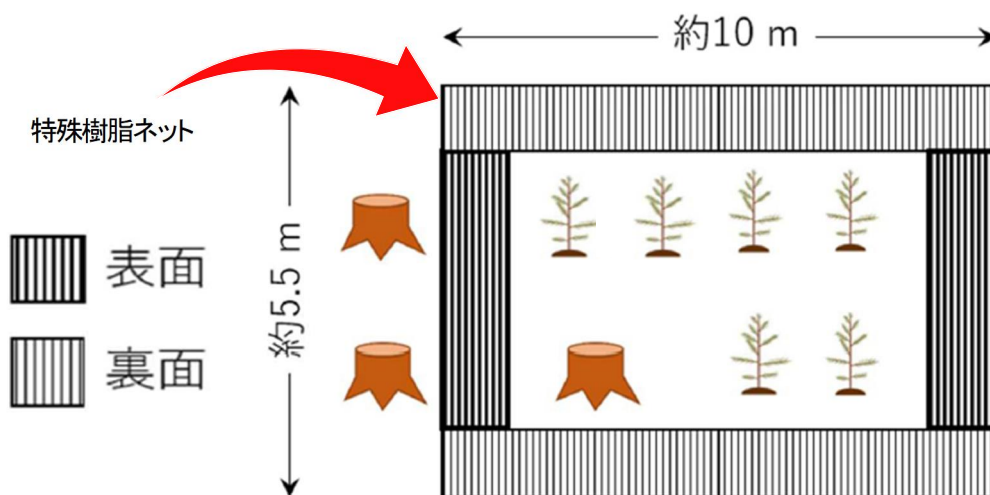


センサーカメラを設置して試験地付近での動物の動きを確認



試験地 ①

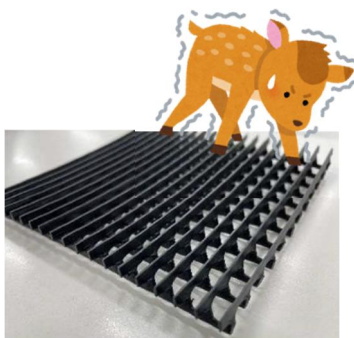
特殊樹脂ネット設置箇所のイメージ図



センサーカメラ

試験地は、特殊樹脂ネットを横に2枚（上下で計4枚）縦に1枚（左右で計2枚）並べたサイズ。大きな切株などがない場合、試験地内には植栽木が8本程度ある計算となる。

※イメージ図は前田工織株式会社作成の資料をもとに加工・追記



イノシシやシカがネットの上を歩こうとすると蹄が滑ってしまい、身体を支えることができない。その状態を嫌がり侵入を諦める



ムマイスギの特性である

ふくじょうせい

伏条性で更新した林分

かるおか

軽岡スギ遺伝資源希少個体群保護林

設定目的

林内の一部に群生する当該地固有の希少樹種であるムマイスギを保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源としています。

ムマイスギには、枝や幹が地面についた部分から根を出して成長する伏条性が強いという特性があります。地況・林況

90年ほど前の皆伐跡地に、ムマイスギの特性である伏条性により更新し、現在の林分が成立したと推定されています。

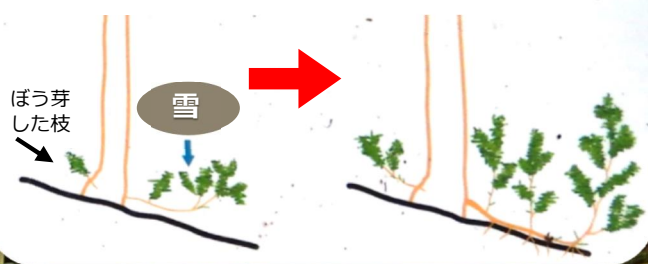
シリーズ

中部の保護林(第52回)

所在地
岐阜県高山市



伏条更新のイメージ



国有林野には、世界自然遺産を始めとする原生的な森林生態系を有する森林や、希少な野生生物の生育・生息の場となっている森林が多く残されています。

国有林野事業では、1915年（大正4年）以降、こうした貴重な森林を「保護林」として設定し、森林や野生生物等の状況変化に関する定期的なモニタリング調査を実施して、森林の厳格な保護・管理を行っています。

お問い合わせ先：計画保全部計画課 ダイアルイン：026-236-2612

※詳細は、コードを読み込んでください。





崩壊地の山腹工完成（平成 20 年）



現在の状況（令和7年）

長野県飯田市宮ノ上から同市座光寺の伊那谷総合治山事業所内に移転し、

飯田治山事業所は令和六年四月、

治山技術官 向山 剛

【伊那谷総合治山事業所】

飯田治山事業所

シリーズ



現場最前線からの便り

国有林の現場の最前線となる森林事務所・治山事業所等の仕事や、管轄する地域の特徴などを紹介します。

中央アルプスを源とする天竜川流域の松川上流域において、松川入地区民有林直轄治山事業を実行しています。松川入地区における治山事業は、昭和二十八年から長野県により実施されてきました。昭和三十六年に伊那谷地区に大規模な土砂災害と河川氾濫をもたらした「三六災害」をはじめ、度重なる台風や豪雨災害により飯田市の水源である県営松川ダムへ土砂が流入し、ダム機能が危機的状況に陥りました。このため、長野県・飯田市・松川入地区関係者からの要請に基づき、平成五年、民有林直轄治山事業に着手しました。令和五年度には事業が完了した区域を長野県へ移管し、現在は約四、七二二の民有林を事業区域として実行しています。事業区域の大半が、侵食の著しい花崗岩深層風化地帯（マサ土）であり、



天竜川で橋脚工事が進むリニア中央新幹線
（伊那谷総合治山事業所上空から撮影）

事業着手時は表層剥離型の崩壊地が多数存在していました。これら崩壊地の復旧にあたっては、緑化工の工種選択がその後の森林への復旧を左右することから、施工効果が高く施工しやすい工種・工法の採用が重要となります。これまで培ってきた治山技術による森林への早期復元を目指し鋭意取り組んでいます。近年では地球温暖化による局所的豪雨が多発し、甚大な災害が発生しやすい状況となっています。治山事業が山地災害の防止や地域の安心・安全を確保していることもPRしな

がら、引き続き事業に取り組んでいきます。



地元関係者への説明会（筆者：中央）

■未来の担い手へのメッセージ

荒廃地を森林に回復させるという壮大な治山工事の計画から実行に携わる過程の中で、自分の思いを反映させることや形として残せることにやりがいを感じることが出来ます。さらには様々な方とのコミュニケーションにより新たな知識や知見を得ることが出来るのもこの仕事の大きな魅力の一つです。

シリーズ

私の森語り
もりかた

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。



「岐阜樹木育苗センター」設立から
特定母樹を用いたスギコンテナ苗
の生産」



住友林業 岐阜樹木育苗センター
シニアマネージャー
かわぞえ みねお
川添 峰夫

■自己紹介

岐阜県大垣市出身で、二〇一六年三月天竜森林管理署長を退官後、同年八月から住友林業株式会社岐阜樹木育苗センターに再就職しスギコンテナ苗の生産管理に従事しています。

これまで国有林等で培ってきた森林技術を苗木生産に生かし生産性の向上、苗木の品質向上、苗木の販路拡大と普及に取り組んでいます。

■活動内容

人工林の大半が収穫期を迎え、皆伐再造林の増加に伴う全国的

な苗木不足が予想される中、当社は全国六カ所に環境制御型苗木生産施設を展開しています。

二〇一五年には岐阜県と苗木の安定供給に関する協定を締結し、二〇一七年三月、岐阜県下呂市に「岐阜樹木育苗センター」を設立しました。民間企業と自治体が連携して苗木供給体制をつくるのは全国初の取り組みです。



岐阜樹木育苗センターの外観

岐阜県には、大型製材工場や合板工場、木質バイオマス発電所があり、原木ニーズが高い地域でも

あり、当社が独自に開発した苗木生産技術を用いて、不足している苗木の生産・供給を行うことにより、県内の森林資源の積極的な循環活用が期待されています。

当センターの施設内には、手作業の種まきに比べて五倍〜十倍の生産性を高める半自動播種機や十四万個体の発芽を可能にする発芽室、育苗台がレールを自由に移動できるムービングベンチの導入により、女性一人でも一度に千五百本以上の苗木を移動できます。さらに二〇二二年度から培地充填機や穴あけ機を導入し、労働負担のさらなる軽減と生産性の向上（手作業と比較して三〜五倍の生産性）に取り組んでいます。

これらの環境制御設備と一体となった室内環境を数値化できる「クラウドシステム」の導入により品質の高い苗木生産が可能となっています。

種子に赤外光を当て、種子内部の違いを検査し、発芽が期待される充実種子と発芽しない種子を容易に見分ける充実種子選別装置を開発し、発芽率の向上に寄与しています。

■メッセージ

二〇一八年にスギ特定母樹の閉鎖型採種園を整備し、二〇二五年には、自社の特定母樹採種園から採取した種子を使用し、岐阜県内において特定母樹のコンテナ苗を初出荷しました。

この苗は中部森林管理局が取り組む「超緩効性肥料を用いたエリートツリー等コンテナ苗の活用試験地」へも提供しています。今後も引き続き少花粉スギなどの花粉症対策苗や成長の良いエリートツリー苗の生産を拡大していくこととしています。



スギ特定母樹の閉鎖型採種園

■連絡先

岐阜県下呂市乗政786番地17
住友林業株式会社資源環境事業本部
森林資源部 岐阜樹木育苗センター

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第 52 回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「姫路城心柱用材」その二



① 丸太を滑らす簡易な道「サデ」に載せられた用

苦勞の末に発見され伐採された姫路城西心柱用材でしたが、裏木曾で記録されている中でも指折りのこの巨木を運び出すことがまた一大事でした。通常なら五畧や六畧といった長さに玉切りして運び出すものですが、今回は城を支える心柱用材が求められているので、長いままで運ばねばなりません。細い先端を一部切ったものの、それでも長さ二十八畧、重さ約十トものヒノキ大材を動かすことになりました。

当初、姫路城関係者と木材業者はヘリコプターでの輸送を考えていたのですが、急峻な地形と気象条件の厳しき、用材のあまりの重量から不可能と判断されました。そうなると運材のノウハウを持った地元・付知営林署（現在の東濃森林管理署）が山からの運材の大部分を助力せざるを得なくなりましたが、用材が発見された場所は搬出路も無い奥山であり、当時の唯一のルートである森林鉄道は幅六百畧・高さ百畧以上の出ノ小路谷を挟んだ向かい側。どうかして、巨木を谷の対岸まで動かすことが難題として立ちはだかりました。当時の付知営林署は裏木曾の大径材を各地の神社仏閣の戦後修復等に生産

した経験を持つ集団でしたが、彼らをもつてしても扱ったことのない巨木です。架線で対岸に渡すにしても、通常の林業架線で運べるサイズではありません。そこで全国の営林署に情報を求めたところ、九州で二本のケーブルを併用して五十畧余りの貴重材を運搬した事例が見つかりました。このアイデアから、三本のケーブルと三台の集材機を併用して荷重を分散しながら用材の谷渡しをする「トリプル・スカイライン方式」が考案されました。

この運材方法の実現に向けて入念な検討がなされましたが、前代未聞の方式であり、現場で発生する問題を修正しながらの架線設営が完了したのは、巨木の発見から一か月以上経過した昭和三十四年六月半ばとなっていました。運材はまず、伐採した地点から数百畧の斜面を大勢の人手で慎重に動かされ、古い「サデ」（丸太を滑らす道）



② 昭和三十四年、伐採される前の姫路城西心柱用材。樹高三十五畧のヒノキ巨木であったとされる。

守る中、谷向こうに備え付けられた三台の集材機によって運材が開始。あまりの規格外の用材の大きさに勝手が分からず、最初は危なっかしい場面もあったようです。



③ 根元を集材機で引き上げながら
巨大な用材に搬器やワイヤーを取り付ける

の跡や木馬道を利用しながらウインチと人力で架線設備の場所まで引つ張られました。六月二十二日、「トリプル・スカイライン方式」による巨木の谷渡しの日となりました。用材には搬器（はんき）は架線集材機で木材を吊るす滑車（か）が多数取り付けられ、「念には念を入れ」と蜘蛛の巣のように補助のワイヤーが張まわされました。午前十時、関係者や話を聞きつけた報道陣が見

谷渡しが行われた出ノ小路の谷は、時に予想外の突風が吹くことが知られており、万が一これが吹いたらどうなるかが大いに懸念されたのですが、幸いにして初夏の快晴の中、風も殆どなく、六百以上の空中の運材は無事に進んでいきました。関係者の緊張



④ 出ノ小路谷を前代未聞の「トリプル・スカイライン方式」
で渡される姫路城西心柱用材の巨木

の中、巨大な用材はゆつくりと、約十分程で谷を渡りきり、対岸の山腹に到着した際には大きな歓声があがったそうです。



⑤ 無事に対岸に渡り切り山腹に突き刺さる
姫路城西心柱用材

半年間あまり、この心柱用材にかかりきりであった関係者は大いに安堵し、本件はこれで殆ど成功したのも同然かと思われました。しかし、実際はそうではなかったのです。

参考文献：「随想 姫路城の心柱物語」

福山幸七（名古屋営林局 O B）著 非売品

写真②～⑤は福山氏が姫路城管理事務所に寄贈したアルバムより

（現在は姫路市立城郭研究室所蔵）

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。

これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。当サイトへは、下記コードを読み込んでください。



各地からの便り

恒例の「冬の森林教室」を開催！

【中信森林管理署】

十二月十一日、松本市堀米保保育園の園児十八名（年長組）を対象に冬の森林教室を実施しました。



ほりごめどんぐりの木を作成した園児達

園児達は、どんぐりや森の生き物との関わりについてクイズ形式で学んだあと、「ほりごめどんぐりの木」と題して模造紙に描いた太い幹の周りに、葉っぱやどんぐりの形の折り紙を貼り付けました。令和七年は山のどんぐりが不作で熊がエサを求め、里に下りて食べ物を探していたので、折り紙を貼りながら全員で翌年のどんぐりの豊作を願いました。



枕木の検査の様子を見学

広葉樹の有利販売に向けた勉強会

【名古屋事務所】

十二月十五日、近年需要が高まる国産広葉樹に関する知識の向上を目的として、株式会社小林三之助商店の御協力頂いて勉強会を開催し、各署等の職員約四十名が参加しました。午前中は、岐阜県各務原市にある同社の広葉樹原木市場を見学し、広葉樹の多用途、良材の見分け方などのアドバイスを受けました。

午後からは、枕木の製造を主としてチップ製造や木質リサイクルも行う可児工場で、木材を有効活用する取組などの説明を受け、今後期待される国産広葉樹の供給に向けて、有意義な一日となりました。

多くの応募

ありがとうございます

昨年四月中旬から応募を開始した「中部の森林 フォトコンテスト 二〇二五」につきましては、締切の十二月中旬までに、「山の仕事にスポットライト」「人の心を惹きつける山の表情」それぞれのテーマに数多くの応募をいただきました。

作品をお寄せいただいたみなさまに感謝申し上げます。今後審査を行い、二月中旬以降に入賞作品をお知らせの予定です。



各地からの便りは、ホームページへ詳細を掲載しておりますのでどうぞご覧ください。

各地からの便り



広報「中部の森林」257号
発行:林野庁中部森林管理局
編集:総務企画部 総務課 広報

〒380-5875 長野県長野市栗田 715-5
電話:026-236-2531
<https://www.rinya.maff.go.jp/chubu>



メールマガジンへ登録いただくと、広報「中部の森林」の発行日にURLを配信します。

(奇数月の発行を予定)

メールマガジンの登録サイト

<https://mailmag.maff.go.jp/m/entry> において
配信を希望するメールマガジンの中から
中部森林管理局広報「中部の森林」を選択して下さい。